

# 農村成人の余暇活動の研究

大 西 正 曹

## 一 は じ め に

戦後の産業構造の変動により、労働の形式や性質が大きくかわった。いままでの単純な仕事に拍車がかけられ、オートメーションは、生産工程や包装・選別そして運搬にまで及び、その調整と管理が従業員に精神的な苦痛を与えた。<sup>(1)</sup>この結果、機械を使う立場から逆に使われるという立場になったために人間性が精神的にも肉体的にも疎外されるようになり、労働者は工場以外のところに自由を求めたいという欲求をもつようになった。そしてついに余暇に対する欲求がこれら労働者の心理を大きくかえていった。こうして労働の質的变化によって余暇に対する意識が急速に強くなつていったのである。<sup>(2)</sup>

“よく働き、よく遊ぶ”というのが人間本来の姿である。<sup>(3)</sup>ところが人類が進歩し、支配階級と被支配階級とに分化するにつれて、洋の東西を問わず、“労働は善であり、遊びは悪である”という考えが押しつけられたがこれは、“支配階級”が生産の低下を防ぎ、あるいは生産をより増加させるためにおこなった思想的な統制であつた。このため、遊びはもとより、余暇そのものまでが罪悪であるという考え方が一般社会に広がつていった。明治に入つて

からは、欧米先進諸国につづけとの考えで余暇に対する罪悪感は一層強められ、労働の神聖化と余暇の罪悪感是人々に深く浸透していった。こうした状況のうちに、大戦に入り余暇は一層国民大衆から遠去かっていったが、敗戦により国民の生活価値観が著るしく変化し、余暇に対する考え方も欧米先進国の考えを徐々に取り入れるようになってきた。

### (一) 労働時間の変遷

雇用労働者の実働時間は、昭和三六年以降年々減少しており、四七年には三五年より一ヶ月当り一八時間減少し、一八四・七時間で一日七・四時間（二五五として計算）となっている。これは労働基準法で定めた所定内労働時間よりも〇・六時間少ない。この所定外労働時間、すなわち残業時間の減少の傾向はたんに経営上の問題から残業時間が減少しているのではなく、労働者が残業を望まないことの事実を考えねばならない。<sup>(5)</sup>

労働省婦人少年局の昭和三九年及び生産性労使会議の「労使の焦点」（一九七〇年七月号）の「残業について」の意識調査によると「残業はなるべくしないほうがよい」と答えたものが「収入が増えるから残業は多いほうがよい」と答えたものを大きく上回っている。とくに「労使の焦点」によると「収入が増えるからやりたい」と答えているのが激減しているがこれは、所得の増加を望むよりも、労働時間の短縮、すなわち余暇を多くもちたいという考え方をする人が多いことをものがたっている。最近、週休二日制を労働者が望み、それを実施している会社が増えているが、これはその証左の一つといえよう。週休二日制は、総合労働研究所の一九七一年版「賃金資料」によると、五千人以上の企業で二三・一%、千人以上の企業においては一五・八%が実施している。また夏期休暇制度を設けているところが、三六・二%もあり、しかも全員一斉休暇がそのうち五割を占めている。週休二日

制とともに、夏期休暇も今後ますます普及されよう。

さらに労働時間の短縮においては、労働白書によれば、三六年には二〇五組合が労働時間短縮の要求を出していたが、四〇年には、その約五倍の一六五九組合が要求しており、しかも、何らかの形で労働時間短縮の実現をした組合が三六年の一三二組合に対して、四〇年には六倍近い一六〇九の組合が実現している。このような労働者の要求は、一般の商店にも及び、昭和四一年では、全国の商業・サービス業の一斉週休制を実施している事業所が一二九万事業所、二四七万人（労働省労働基準局調べ）に及んでいることから、あらゆる業種が労働時間の短縮という方向に進んでいることが理解できよう。<sup>(6)</sup>

しかるに農村においては、都市における労働力不足と賃金上昇で工場が地方に分散し、農村に労働力（者）を求めるようになってきた。一方地方の消費、流通部門の拡充と交通機関の発達で通勤圏が拡大していった。他方農家の所得は、農業の低所得と社会保障の不備で、一家を支えきれないために、又都市労働者との生活格差の幅を縮めようとするために、多就業形態としての兼業化によって不足分をカバーしようとしている。さらに農業機械化の進展は農家労働力の流出に拍車をかけた。こうして昭和三八年には農外所得が農業所得を上回るようになった。このように農業の比重低下が一層激しくなった結果、そのしわよせが農家の主婦、老人の労働過重をきたし、また世帯主の絶対労働時間の増大となって現われてきた。<sup>(7)</sup>このような状況にある農村において、農家の世帯主は余暇に対してどう考えているのか、あるいは余暇の現況はどうかを都市労働者のそれと比較することによって究明しようとするものである。

## (二) 仕事対余暇

仕事と余暇を関連づけるのには、一般に三つの典型的な方式があるといわれている。

(一)「拡大型」は仕事上の活動と内容的に往々類似する余暇活動をもち、仕事と考えられていることと余暇と考えられていることの間には、はっきりとした区別をせず、中心的生活の関心を家庭や余暇という面よりも仕事における態度からなりたっている。このパターンを示す人々は、自分たちが余暇と規定している活動にはむしろあまり時間をさくことはない。その余暇は彼らにとって、個性の発達の機会という機能をもっていることが多い。

(二)「中立型」は仕事とはやや異なる余暇活動をもち、仕事と余暇を区別し、仕事の世界よりも家庭や余暇に中心的生活関心をおく人を指す。これは、自分の能力の一部を仕事に使い、仕事に関しては、無関心か、あるいは打算的に包絡し、それに外生的仕事要因に満足感をみい出すことがあげられる。仕事をはなれると、彼らは余暇時間はかなり長くもち、余暇は彼らによって骨休めの意味をもつ。

(三)「対立型」では余暇活動は仕事とはまったく異なり、仕事と余暇の間にはっきりした区別があつて、中心的生活関心は仕事外の領域におかれている。仕事に対して敵対的あるいは「疎外的」態度を示し、満足感の外生的要因に見出される点があげられる。仕事外の領域では余暇の時間が長いように考えられる(中立型よりおそらく不規則な場合が多いかもしれない)そして、余暇の主な役割は仕事からの自己回復である。<sup>(8)</sup>

## 二 農村成人の余暇活動の実態

### (一) 属性

以上、余暇の歴史、労働時間の変遷、余暇と労働の関係を見てきたわけであるが、それによると、……余暇の関

第1表 対照群別属性

属性	対照群	A	B
対象者数		140人	650人
年令24才以下		3.6%	29.1%
50才以上		48.6	2.5
性別 男		86.4	88.3
女		13.6	11.7
学歴 大学高専卒		6.4	10.9
家周期 独身		7.1	34.0
ご夫婦の親同居		37.1	6.5
家族員数4人以下		48	67
5人以上		49.2	32.3
家庭の年収			
99万円以下		30.0	22.9
200万円以上		19.3	15.2
職 種・職 業		専農・第一種兼農業 42.1 第二種兼農業 46.4	管理・専門 26.3 事務 15.6 作業員 58.1
持 家 率		95.0	63.5
自動車所有率		52.9	39.5
週 休 制		毎月1回	毎週1回

(注) 不明は省略

(注) Aは1973年 Bは1972年

係は、(1)拡大型、(2)中立型、(3)対立型というように区別されている。本小論の目的は昭和四七年と昭和四八年に名古屋市内の中堅機械工業と福知山市内の山村に対して実施した余暇に関する調査結果にもとづき、都市労働者と農村労働者の余暇活動に対する意識並びに余暇活動の種類の差異とこの仕事と余暇の関係が前述した三つのパターンのどれに該当するのかを検証しようとするものである。

まず比較対照される福知山市内の一山村（以下Aとする）と名古屋市内のW機械（以下Bとする）は第一表のように年令に於いては、Aが高令者が多く、Bは若年者が多くなっている。また学歴では、Bが若干Aより高学歴者が多い。家族周期においてはAがご夫婦の親と同居しているのが多く、これに対してBでは単身世帯が多くなっている。また家族員数では、Aが五人以上で過半数を占めるのにくらべ、Bでは四人以下が多くなっている。つぎに家族の年間収入において、Aは九九万以下の比較的低い収入者がBにくらべて若干多い。そして持ち家については一部の市営住宅を除いて全部持家であるAに対しBは六割弱

の者がもっている。又自動車の所有については、Aが過半数（トラックも含む）を占め、Bでは四割程度の者がもっている。さらに業種や規模については、Aが専農プラス第一種兼業農家が四割弱で第二種兼業農家が五割近くとなっており、何らかの形で農業を営んでいるのが九割近くも占めている。また主たる農産物は米と筍であり、若干野菜や麦を作っている。平均耕作面積は五・五反である。Bでは機械製作であつて規模一、五〇〇人の大企業となっている。そして休みについてAは毎月一回で、Bは週に一回となっており残業はなるべくしないという企業である。以上これら二つについて比較検討し、都市と農村においてどのように余暇が考えられているのか、又どのような点が違つているのであるのか、そしてその原因は何か等を考察してゆきたいと思う。尚これらの調査につづいて他の地域でも調査して現在分析中であるが今回はテストケースとして比較を試みたものであり多くの地域との比較考察は別稿に譲る。

## (二) 余暇の現況

労働と余暇との関係を単純集計したその結果から見ると、余暇の現況では第二―(一)表においてみられるように、Aについてはひまが少ない者三二・九%であつて、Bにおいては一一・四%となつている。これに対してひまがあるというのは、Aについては一〇・〇%でありBは三一・四%の比率になつている。また、仕事以外で何かをするとき時間の都合がつくかという問に対する回答において、第二―(二)表にみられるように、都合がつくというのがAでは二四・三%でありBは四〇・六%となつており先の結果と同じ状況になつている。このような結果が生じたのは、Aにおいては会社から帰宅後に野良仕事をして夕食にのぞむためひまが少なく、またBについては残業が少ないために生じたものと考えられる。しかし最近では通勤の時間もかなりかかるため純然たる余暇時間は都市および

第2表 余暇の現況

対 照 群	A	B
事 項		
(1)余暇の現況 多く暇がある 暇が少ない	10.0% 32.9	31.4% 11.5
(2)仕事以外で何かをするとき 時間の都合がつくか 都合がつく 都合がつきにくい	24.3 75.3	40.6 57.2
(3)収入対余暇 収入より余暇 余暇より収入	43.6 47.9	27.4 67.2
(4)余暇の程度 一生懸命楽しみを追求する 普通程度 レジャーには熱中しない 楽しいとは思わない 関心がない	4.3 52.1 28.6 5.0 7.9	9.8 50.9 35.7 0.9 2.0

農村においても少ないと思われる。

以下余暇について一般的な傾向を述べていくと、収入対余暇を聞いた「収入は今のままで、もっと自由になる時間・暇がほしい」——余暇志向と「暇が減っても、もっと収入がほしい」——収入志向については、第二―(三)表のようにBにおいては余暇より収入が過半数を占めているのに対して、Aでは両者ともほとんど似かよった結果となっている。

また、どの程度余暇に熱中しているかを見た第二―(四)表のように、余暇に一応熱中するというのがAでは五六・四%でBにおいては六〇・七%となっており若干Bの方が多くなっている。反面余暇を楽しく思わない者は、Aが一二・九%でBについては二・九%とほぼAがBの四倍近くの数字になっている。つぎに余暇の満足度をみると、第三―(一)表のようにAの方が一二・一%の満足に対してBは二五・五%となっている。さらに仕事対余暇の関係をみると、第三―(二)のように仕事が生きがいだとしている者が七・一%でBにおいては二・二%となりAがBより高い反面、Bにおいては余暇は仕事に劣らず大切に思っている者が三〇・五%となっている。しかし疲労回復、気分転換のために必要であるに対して

第3表 余暇及び仕事に対する満足度

事 項	対 照 群	
	A	B
(1)余暇の満足度 ・非常に満足を感じている ・不満	12.1% 30.7	25.5% 33.8
(2)仕事対余暇 ・仕事こそ生きがいなのでひまな時間などいらぬ ・余暇は仕事に劣らず生きるために必要でありかつ独自の値をもつものである ・疲労・回復・気分転換のため必要	7.1 5.7 85.0	2.2 30.5 65.1
(3)仕事対余暇 ・仕事と余暇ははっきり区別する ・話しをしても別に仕事に支障があるわけではないので効果あり	51.4 32.9	42.6 50.6
(4)仕事対余暇 ・仕事本位 ・仕事があつてレジャーがある ・余暇本位	9.6 78.5 11.8	3.9 79.0 17.6
(5)生活の重点 ・仕事本位 ・家庭本位	37.9 44.9	56.0 19.0

みると、第三—(三)表のように仕事と仕事以外のことは、はっきり区別して労働を規律あるものにするのが大切であり監督の注意は当然であるという仕事本位的な考えをもっている人が、Aにおいては五一・四%となつており、Bについては四二・六%でAの方がBより高くなつてゐる。この点からも先の事柄が検証される。つぎに仕事本位が九・六%になつてゐるのに対して、Bは三・九%となり、その反面余暇本位においては、Aが一・八%でBが一七・六%と逆転してゐる。尚、この数字は不明を除いた%である。以上全般的に見た段階では、Aについては時

はA・Bそれぞれ八五・〇%と六五・一%でかなり高くなつてゐる。よつて余暇の主たる目的がここにあるように思われる。つぎにこのような考え方を間接的に見るために、一緒にまゆをより分けていた女工さんたちが何げなく話しをしてゐたところ外人の監督が「日本の娘さんは怠け者だ」といつて注意したそうですが、あなたはこれについてどう思いますかという質問に対して各人の回答を分析して



間的な余裕は少なく又その余暇をそれほどまで熱中する時間もなく、全般的に余暇に対する満足度は低くなっている。また仕事と余暇の関係においてはAがどちらかといえば、仕事本位に考えている傾向があるように見られる。しかしながら、生活を聞いた「あなたは生活の重点を仕事においておられますか、それとも家庭ですか」においては、第三―四表のようにAについて仕事に重点をおいている人(仕事本位)が三七・九%になっており、Bでは五六・〇%となっている。さらに家庭に重点をおいている人(家庭本位)がAでは四四・九%でBについては一九・〇%となっており、先に述べた事柄とは若干くい違っているように考えられる。しかし、Aにおいては仕事と家庭とは両立しており、家庭を中心にした仕事であるために生活の重点を聞かれた場合には、家庭中心の生き方という傾向が強くなるのではないかと考えられる。

### (三) 余暇活動の種類

以上のことは、余暇活動の種類をみてもある程度いえる。すなわち第四表においてみられるように、日頃一番良くやっている余暇活動はAについて庭いじりが三五・一%で一位であり、つづいてテレビの二四・四%になり三位には読書とごろね・休息がそれぞれ八・四%となっている。その反面スポーツやドライブについてはそれぞれ三八%、二・三%とわずかに少ない。それに対してBにおいては、テレビが一八・六%で一位を占め、スポーツの一三・三%がつづき、三位には一〇・七%の庭いじり・日曜大工となっている。これらに対してごろね・休息は五・三%とわずかな数字になっている。<sup>(9)</sup> このように差が出るのは、農村においては、余暇の種類も少なく、また仕事と家庭とが混然と一体となっているために、どうしても余暇活動は手近かなものに集中する傾向がある。それに対し都市では多種類の余暇があり、それゆえ、余暇活動も選択的に行える。そのため各自が行なっている余暇活動は農

第4表 余暇活動の種類  
(日頃よくやっている余暇活動)

対照群		A	B
項目			
スポーツ(する)		3.8	13.3
テ レ ビ		24.4	18.6
ド ラ イ ブ		2.3	6.1
読 書		8.4	6.8
碁・麻雀		4.6	7.8
ごろね・休息		8.4	5.3
庭いじり		35.1	10.7
日曜大工			
旅行		0.8	1.2

村のように特定の余暇活動に集中することなく広く分散するた  
めであると思われる。これに関連して、余暇活動の満足度を比  
較測定したが、これからも余暇時間の量の差が余暇活動に及ぼ  
す影響が検出せられる。満足度は欲求充足度に比例し、欲求度  
に反比例するという仮説にもとづき、普段一番よくやっている  
余暇活動の頻度から算出される。余暇活動の充足度得点をやっ  
てみたい余暇活動の頻度から算出される欲求度得点で除して一  
〇〇を乗じたものを満足度得点とした。<sup>(10)</sup>これによってみると、

庭いじり・日曜大工・テレビはAが一六四、一〇〇、Bが一六三、一三六と満足度得点が高く、A・Bにはあまり  
差がみられない。つまり一応どちらもすきなだけ庭いじり・日曜大工・テレビを楽しんでいることになる。また、  
読書とごろねでは、Bにおいては欲求度もあり充足度もこれに見合っているので満足度も一五七、二三五と高くな  
っているのに対し、Aでは欲求度はBにくらべてかなり高いのに、充足度がかなり低いため、満足度はBの半分な  
いし三分の一度程度になっている。このことから余暇活動の場合、同じ欲求があっても、余暇時間が多いか少ないか  
によって充足度が違ってくるものと思われる。なお、第一表のように自動車の所有率は、Bについて三九・五%で  
Aでは五二・九%とかえて多いがこの点からみると、ドライブをするのにはただ車を持っているだけではなく、  
まとまった暇が必要であるといえるのであろう。

#### 四 余暇の満足度と仕事の満足度

第5表 レジャーの満足度と仕事の満足度

対照群 仕事の満足度 レジャーの満足度	A					B				
	満 足	どちらとも いえない	不 満	計		満 足	どちらとも いえない	不 満	計	
				%	実数				%	実数
非常に満足	100.0	0	0	100.0	3	37.8	24.4	37.8	100.0	45
満 足	64.3	14.3	21.4	100.0	14	38.0	34.7	27.3	100.0	121
どちらとも いえない	48.8	31.7	19.5	100.0	41	33.5	39.4	27.1	100.0	251
不 満	13.8	44.8	41.4	100.0	29	25.4	37.8	36.8	100.0	185
非常に不満	14.3	14.3	71.4	100.0	14	20.6	35.3	44.1	100.0	34

今まで余暇活動の種類の違いを明らかにしてきたが、さらにこれを別の観点からつまり、仕事と余暇に対する満足度との関係より違いが生じる理由を検証しようと思う。

余暇活動の満足度と仕事の満足度との関連において、第五表においてみられる通り、Aでは余暇に非常に満足している者の全てが仕事にもやはり満足している。一方余暇に非常に不満を感じている者の七一・四%が仕事に対してもやはり不満を感じているといったように方向のみならず余暇の満足度の程度にしたがってほぼ例外なく仕事の満足も増し、一貫した関連性がみい出される。他方Bでは、余暇に非常に満足している者のうち仕事に対して満足している者は三七・八%であり、同じく仕事に対して不満であるという者は三七・八%となっている。このように余暇と仕事との間には必ずしも一貫性があるとはいえないのである。よってAの場合とかなり異ってくる。このことからAの場合、Bに比べて仕事に対する満足度が余暇に対する満足度によって左右されることが多いといえることができるのではなからうか。これを他の資料を使って検証してみようと思う。尚検証方法はいろいろ考えられるが、第四表のように日頃

第6表 テレビの視聴状況

時間及び番組・その意味づけ

対 照 群	A	B
事 項		
テレビ視聴時間		
2時間以下	61.4%	26.4%
3時間以上	14.3	36.6
よく見る番組		
1) ニュース・ニュース解説	63.6	49.4
2) テレビドラマ	42.9	42.6
3) 映 画	21.4	40.9
4) 歌 謡 曲	15.7	22.2
5) ゲームクイズ	7.1	19.7
6) ス ポ ー ツ	17.9	40.6
人格形成・個性化		
1) 豊かで充実した人格の形成に役立つ	57.1	25.0
2) 自分の人柄や生き方に合っている	28.6	28.9
3) 余り自分の柄に合わず自己充実にもならない	14.3	46.1
教養・知識・情報		
1) たしなみや教養を高める	12.0	17.5
2) 情報・知識が増し、視野を広くする	64.0	47.5
3) 勉強とはあまり関係がない	24.0	35.0
選択方法		
1) 効果を考えて自分で自由に選ぶ	42.9	19.1
2) 効果では考えないが一応自分でえらぶ	50.0	66.0
3) 自分のおかれている地位や環境や他人に影響されてえらぶ	7.1	14.9

やっている余暇活動のうち、A・Bいずれにおいてもよくやられている。テレビをみる、という余暇活動の意味等を比較して先の事柄を検証してみることにする。

(四) テレビ視聴状況と余暇活動の意味づけ

まずテレビの視聴時間では第六表のようにAでは、一日の視聴時間が二時間以下というのが六一・四%となっているのに対し、三時間以上が一四・三%とかなり減少している。他方Bでは、二時間以下が二・六四%にすぎないのに対し、三時間以上見るのがAの二・五倍の三六・六%と多くなっている。このよ

うな大きな差がみられるのは、Bにおいては残業が少なく帰宅が一、二時間早くなるがこの程度では、スポーツをしたりドライブをしたりする等には充分時間がないので結局は子供らと一緒にテレビをみて何んとなく時間を過ごしてしまうのではなからうか。つきによくみるテレビ番組について、BではニュースやテレビドラマにおいてAが四二・九%とBが四二・六%でほとんど同じで差異がないのに対して、ニュースではAが若干多い反面、スポーツとかゲームクイズ・歌謡曲になるとBの方が多く、とくにゲームクイズやスポーツはBがAの倍以上の比率となっており差が大きい。このように多いのは、その番組がかかる丁度の時間に会社から帰宅して食事後になるからでただ漫然とみるためではなからうか。反対に他方Aにおいては、兼業農家が多いため会社から帰宅後再び野良仕事、つまり稲や筍さらに野菜作りの世話に時間を費やすため、夕食が遅く又朝も作業をしてから出勤する者が多いため早くから出かけるので当然食後のひとときをテレビでもみて過ごすという習慣がつきにくく、おのずと視聴態度もBの受動的とは違い、自分の好きな番組を選んで情報を得る手段としてテレビをみるが多くなるからだと考えられる。さらにこのような推測はテレビにどんな意味を見出し、これから何を期待するか、いいかえればテレビの意味態様に関する設問の回答から実証されるものである。設問は一一の面にわたっているがそのうちここで関係あるものに対する回答をみると、テレビは人格形成・個性化に役立つかという問についてみると第六表の如く、自分の人柄や生き方にあっているというのはあまり差はないが、充実した人格形成に役立つにおいては、Aは六〇%近くでBの倍以上となっている。一方自分の柄に合わず自己充実のためにもならないという問では反対にAが一四・三%に対し、Bが四六・一%とBの方がAより三倍近くの比率になっている。又テレビが教養・知識・情報とどのように関係するかをみた間においてもほぼ同じような傾向がみられる。すなわち、情報・知識が増すというのが

の 意 味 づ け

A				B				
読 書	碁・麻雀	ごろね	庭いじり	テレビ	スポーツ	碁・麻雀	ドライブ	庭いじり
40.0	75.0	18.2	32.4	19.1	55.1	35.5	46.2	50.0
60.0	25.0	81.8	64.9	66.0	39.1	48.4	30.8	46.2
0	0	0	2.7	14.9	5.8	16.1	23.0	3.8
18.2	25.0	0	22.9	20.8	18.8	20.8	25.0	35.6
36.4	25.0	80.0	58.6	29.2	37.5	41.7	50.0	46.7
45.4	50.0	20.0	8.6	50.8	43.7	37.5	25.0	17.7
30.0	33.3	0	27.7	25.0	20.0	7.4	22.2	17.5
20.0	33.3	0	5.6	19.4	36.0	37.0	18.7	7.5
50.0	33.3	100.0	66.7	55.6	44.0	55.6	59.1	75.0
70.0	50.0	22.2	82.9	35.2	20.5	26.3	39.4	89.6
10.0	0	44.4	11.4	45.9	24.4	23.7	14.3	6.2
20.0	50.0	33.3	5.7	18.9	55.1	50.0	46.3	4.2
20.0	0	0	16.7	5.9	9.5	3.0	6.1	12.8
60.0	33.3	40.0	61.1	32.4	23.0	9.1	21.2	38.5
20.0	66.7	60.0	22.2	61.7	67.5	87.9	72.7	48.7
18.2	25.0	40.0	23.1	34.2	32.5	35.3	28.6	28.0
72.7	75.0	60.0	70.8	55.3	60.0	52.9	71.4	70.0
9.1	0	0	5.1	10.5	7.5	11.8	0	2.0
0	25.0	0	12.1	12.5	21.4	18.7	0	12.2
75.0	75.0	87.5	78.8	62.5	71.4	59.2	88.9	73.2
25.0	0	12.5	9.1	25.0	7.2	22.1	11.1	14.6
20.0	25.0	0	19.7	25.0	39.7	13.0	18.2	17.8
70.0	75.0	90.0	69.4	28.9	55.6	56.5	81.8	71.1
10.0	0	10.0	11.1	46.1	4.7	30.5	0	11.1
20.0	25.0	0	16.2	17.5	14.8	8.0	8.0	16.3
60.0	25.0	0	29.7	47.5	24.1	24.0	40.0	20.9
20.0	50.0	100.0	54.1	35.0	61.1	68.0	52.0	62.8
0	25.0	10.0	17.9	6.7	11.6	8.8	4.3	20.8
71.4	25.0	30.0	74.4	30.0	72.5	58.6	56.5	56.6
28.6	50.0	60.0	7.7	63.3	15.9	32.4	39.2	22.6
0	0	0	13.5	3.8	37.7	13.0	33.3	15.8
100.0	66.7	100.0	81.8	80.0	56.6	78.3	62.5	73.7
0	33.3	0	5.4	15.4	5.7	8.7	4.2	10.5

第 7 表 余 暇 活 動

意 味 づ け	対 照 群	テレビ
	余暇の種類	
(1) 効果を考えて自分で自由に選ぶ 効果までは考えないが、一応自分で選ぶ 自分のおかれている地位境遇や他人に影響され選ぶ		42.9 50.0 7.1 } 100 %
(2) 新規なものを製作するなど、創造ということがある まったく型通りというのではなく、少しは変わったことをする 従来からの型通りにやる		21.4 46.4 32.2
(3) 自分の才能を育てる 能力を発揮する 才能や能力発揮とは特に関係ない		28.0 28.0 44.0
(4) 自分のすきにできる 他人のことも考慮する必要がある ルールに従うなどの拘束がある		52.0 32.0 16.0
(5) 仕事が一番楽しく、仕事程には楽しくない 仕事のためにもなるが、それ自体も楽しい 仕事から解放されて、思いきり遊ぶため		8.0 28.0 64.0
(6) 仕事のわづらわしいことからの息きぬき 気分転換になる 余り息きぬきにならない		37.0 55.6 7.4
(7) 仲間や世間の評判がよく、威信が増す 威信などとは余り関係ない 評判、威信では余り得にならない		15.8 73.8 10.4
(8) 豊かで充実した人格の形成に役立つ 自分の人柄の生き方に合っている 余り自分の柄に合わず、自己充実にもならない		57.1 28.6 14.3
(9) たしなみや教養を高める 情報、知識が増し、視野を広くする 勉強とは余り関係がない		12.0 64.0 24.0
(10) でき上りや、やりおえたあとの効果が目的 結果も大切であるがやっている間も楽しい やっている間だけの楽しみが目的		17.4 60.9 21.7
(11) 背伸びした感じがある 身分相応である 自分の地位からすると地味である		20.0 76.0 4.0

(注) 対照群Bの数値はB社とC社、D社の回答分の平均値

Aでは、六四％でBの四七・五％より高いが勉強とは関係がないというのが反対にAにおいては、二四％でBでは三五％とBの方が高い率となっている。又自主的選択対他人依存を聞いた間において効果を考え自分で選ぶというのは、Aが四二・九％でBの一九・一％より高くなっている。しかし他人に影響されて選ぶのが反対にAにおいては七・一％でBでは一四・九％とBの方が多くなっている。これらの結果によつてBでは何かを求めようとする積極的な目的をもたず、ただ漫然とテレビをみて時間を過ごしているようである。これに対しAでは帰宅が遅く、その上朝も早いいためテレビを見る場合におのずと自主的、選択的になるものと考えられる。このようにテレビを通じて余暇と仕事との関連をみるとAでは余暇活動を自分の仕事および自己形成の一つの手段としているのに対し、Bでは仕事とは一応切り離してテレビを楽しんでいる傾向にあるように思われる。このことから先の労働と余暇の關係での説明の一部になると思われる。以上テレビを通じて余暇に対する農村と都市の違いを見てきたわけであるが、さらに比較参考するために、農村・都市において共通してよく行なわれている余暇活動である庭いじり・日曜大工についても前述と同じ手法でもって分析考察してみようと思う。

庭いじりでは、人格形成・個性化に役立つか、教養・知識・情報が増すにおいて、第七表のように、A・Bとも差は見られないが、仕事との關係についてみると、仕事のためになるがそれ自体も楽しいでは、Aが六一・一％でBの三八・五％より多くなっている。これに対して仕事から解放され思い切り遊ぶためでは、これとは逆にAが二二・二％でBの四八・七％に対し半分にすぎない。また効果をみた質問において、結果も大切であるがやっている間も楽しいが、Aでは七四・四％でありBの五六・六％より高くなっている。これに対して、やっている間だけの楽しみが目的であるについては逆にBが二二・六％とAの三倍近くの比率になっている。これらの結果からでもB



についてはテレビの場合と同じように、余暇活動の目的が仕事から解放されて思い切り遊ぶためという何かを求めようとする積極的な目的をもたないでただ漫然とやっている。反面Aにおいては、仕事と余暇が融合して行なわれているのではなからうか。

### 三　　む　　す　　び

以上みてきたように、農村における余暇活動は、仕事・家・余暇が混然と一体となっており、前述の分類によれば(一)の拡大型にやや該当するように考えられる。すなわち生活の重点は家庭にしているが、仕事对余暇では仕事本位的な考えが多く、かつ又、余暇活動の意味様態をみると全般的に、その機能として、個性の発揮あるいは自分の才能を育てる・仕事のためによる等を余暇活動に期待している。これに対して、都市では(二)中立型・(三)対立型に近いように考えられる。つまり、生活の中心は仕事よりもやや余暇に近いパターンを示している。又余暇の機能として、仕事やわずらわしいことからの息ぬき・気分転換・仕事から解放され思いきり遊ぶためというように、どちらかといえば、余暇が仕事からの自己回復に主たる目的がおかれているように考えられる。

本研究は、昭和四五、四六、四七年度文部省特定研究「産業構造の変革と労働問題」(代表者、関西学院大学万成博教授)に参加して調査研究してきた。その研究結果の一部中間報告である。尚、考察すべき多くの点が残されているが、これに関する分析は別稿に譲る。

#### 註

- (1) 労働省「単調労働」昭和四〇年。

Charles R. Walker and Robert H. Guest, *The man on the Assembly Line*, 1952. 64p.

流れ作業の職場において、以前の仕事と現在の仕事と比較すると現在の仕事を好んでいる者の比率は非常に低くなっている。事が報告されている。

(2) R・ブラウナー、佐藤慶幸監訳「労働における疎外と自由」新泉社、昭和四十六年。

W・フォーンズ、牧正英訳「産業社会と疎外」法律文化社、昭和五〇年、七三頁において、オートメーションと余暇の関係を「オートメーションが、ある種のタイプの生産工程の仕事に与えた影響の一つは、持ち場の孤立と、仕事への注意力の増大による労働者の社会的孤立の問題である。この職場での孤立が、余暇活動での他人との相互作用を望む割合を増大させた。生産工程に従事する労働者に見られるこの傾向は、仕事面での役割が「自尊心の評価」を有さないもので、余暇活動でこれを満足させようとする気持の現われである。このために、余暇活動で十分に自己顕示欲を満足させるための技術を身につける時間が与えられれば、労働者は、見物人の立場から、活動者に変身することになると言えそうである。最後に、余暇と仕事の関係から、生産工程労働者にとって、余暇活動は、厄介なことからの脱出というよりは、退屈からの脱出だと定義できそうである。仕事が目的というよりも手段とされる人々にとっては、余暇は厄介なことからの解放ではなく、かわりを持つ自由となるのである。」と分析している。

(3) T・ホイジンガ、高橋訳「ホモ・ルーデンス」中央公論社、昭和四十六年。

佐藤毅「わが国における余暇研究の展開とその問題」『年報社会心理学』二号、昭和三十六年、三頁〜二四頁。

石川弘義「労働と余暇―戦時下を中心に」『余暇』ドメス出版、昭和三十六年所収 六五〜七八頁。

関谷耕一「生活時間と余暇問題」『文献研究日本の労働問題』総合労働研究所、昭和四〇年所収 一七五〜一八六頁。

石川弘義「余暇の理論史」『人間とレジャー』、レジャーの思想と行動』日本経済新聞社、昭和四十八年所収 六七〜一一〇頁。

藤竹 暁「戦後における『余暇思想』の展開」『同書』所収 二〇〜二八頁。

戦前までの我国の余暇研究は大正十二年の大阪市社会部調査課による「余暇生活の研究―労働調査報告No.19」を除いて大部分が余暇よりもむしろ、娯楽論に傾斜していた。余暇と労働との有機的関係に立つ研究は戦前には余り研究されなかった。余暇論の大部分は不健全娯楽の追放を主とした目的にあげていた。この傾向は、戦時中において特に強くなり、この時期の余暇論のほとんどが余暇善用による労務生活の昂揚を主たる論点にしていた。

(5) 労働省労働統計調査部「労働統計年報」、昭和四八年。  
全国競輪施行者協議会「参考資料」四九頁～五〇頁、昭和四五年、労委協会「労働時間、休日休暇調査」昭和四六年。

(6) この資料によると昭和四五年の所定週労働時間（交替なき勤務―主たる事業所）は製造業大企業平均で四二・二七時間になっている。また週休二日制も調査対象のほとんどの企業が最低月一回は実施している。夏期休暇は調査対象の製造業の内、六三%の企業が実施しており、そのうちとくに休日を設けたのは、六九・六%もあった。実施の平均日数は三・九日であり、五日以上が三六・五%を占めている。（労委協会調査資料）

(7) 農林省統計調査部「農家の就業動向―一〇年報―」昭和四四年。

(8) S・R・パーカー・他・寿里茂訳「産業と社会」二〇二～二〇六頁、社会思想社、昭和四八年。

(9) 竹田郁郎「都会人の余暇生活」『年報社会心理学』二号、昭和三六年、六七頁。

これによると休日（世帯主のみでかつダブル・チェック）の余暇活動はラジオ・テレビ・新聞が六一・九%で一位であり、以下四〇・一%のころね、二六・四%の庭いじり、日曜大工となっており、どちらかといえば消極的なものになっている。これに対して現在の都市労働者（前者と若干サンプルの属性がちがっているので単純には比較できない）の方が、かなり余暇活動を積極的に行なっているように思える。

(10) 比較するために井森陸平「労働者の余暇」（万成博編『新しい労働者の研究』白桃書房、昭和四八年所収）七〇頁と同じ手法を用いた。